沙羅の瞳

カーティス・N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
沙羅の瞳

【Ｎコード】
Ｎ２１８４Ｆ

【作者名】
カーティス・Ｎ

【あらすじ】
沙羅は、ただ一度の出会いで見初められた、国内有数の資本家、藤堂家の一人息子に・・だが、挙式を直前に、沙羅の心には疑念が重く広がっていた。

壱の章

「もし・・」
中庭の長椅子に腰掛けながら、沙羅は重い息を漏らした。

今日は十月十三日、二十二歳の誕生日までは、あと二日。そして同日、沙羅は国内有数の資産家である藤堂家の一人息子、明との挙式を迎えることになる。

明と出会ったのは半年前、彼の家の広大な屋敷で催されたガーデンパーティでだけだった。
彼は、ただ一度の出会いで、沙羅を生涯のパートナーに選んだのだ。

それ以降、彼とは会えていない。
彼は、藤堂家が力を入れている北極海域の資源開発スタッフのチーフであり、帰国するのは年に数回に満たないからだ。

「メールのやりとりはある。でも、彼が私を決めたのは、ただ一度だけの出会いの場」
沙羅は瞳を閉じ、浅黒く陽に焼けた婚約者の顔を思い出した。

――――
中世の宮廷物語よろしく、名だたる良家の子女を集わせての、ガーデンパーティ。いわば、明の帰国の機会に合わせてのパートナー探しの会だった。
彼は、旧知の友人らとの語らいを一通り楽しんだ後、一人テーブルを離れ、庭園内の美術品を見ていた沙羅に歩み寄ってきたのだ。

「君、食事は」

彼は問いかけた。
「ええ、いただきました」
沙羅は屈みながら、長年の風雨に変色した木製の女神像の足下の埃をハンカチで拭った。
「そう・・」
それ以上の言葉はなかった。明はテーブルに戻り、やがてパーティは解散された。

確かに、明の揺れることのない黒い瞳には、強い好感を持った。真っ直ぐに前を見ている人であると直感した。
だがもともと沙羅は、藤堂家やその親戚とのパイプ繋ぎにと、父から派遣されたただの飾り人形。それ以上、明への感情を深めることはなく、父の期待に添うような働きをできなかった自責の念を胸にもち、帰路についた。

そして帰宅。
「沙羅、でかした」
運転手付きの乗用車を降りる前に、玄関先で待っていた父、野坂文一は興奮を露わにウィンドウを叩いた。
「かの御曹司との婚約だ。藤堂家から正式な電話があった。これでわしも地盤も安泰じゃ」

父、文一は地方の国会議員だった。
立候補地に様々な産業をもつ藤堂家と親戚関係となれば、選挙の地盤は揺るぎないものとなる。自身の引退後にも、沙羅の弟、長男の武に地盤を譲ることができる。

「全てはおまえの美しさから」
父はそう言って遠くを見つめた。

愛する妻を若いときに失くした父は、その輝くような容貌を沙羅が引き継いでくれたことを心底喜んでいた。さらに彼女の美しさは、彼の、いや野坂家の政治生命をも保証してくれたのである。

・・父さんと同じ、藤堂家の一人息子も、母さんの美しい面影を愛したのだ。それならそれで・・

父の決めたことに首を振らない。幼少時からの控えめな態度が、結婚への同意の頷きとして、先方に伝えられた。

それから沙羅の心は不在のまま、挙式の準備は進められていった。その日が近づくにつれ、家内や地域の人々の顔は華やいでいった。父の政敵者とその関係者を除き、誰もが沙羅の輿入れを心待ちにしていた。

だが一方、沙羅の心には重い雲が広がっていた。

「彼が私を選んだのは、外見から。けど、それは僅かの間に消えるはかないもの。もし、その時が来たら、私はどうなる」

沙羅は、いつしか美しさをなくした時の不安に取りつかれていた。

気晴らし・・

しばらく行っていない大学に行ったとしても、キャンパス内の物見高な視線に晒される。卒業単位は前期に修得しているので行く必要もない。

外出も同様だ。家の門から一歩外に出れば、シンデレラストーリーの主役として、マスコミにカメラやマイクを向けられる。

さらに挙式の準備が整ったこの頃に至っては、気を逸らせることもなく、何もしようがなかった。

それで今も、夜風に気持ちを洗ってもらおうと、一人、長椅子に座っていたのだ。

ーーーーー

「でも、こうしていても、同じ考えが巡るばかり。今夜はもう、寝なくては」
立ち上がって飛び石を渡り、玄関に歩き始めた。
「や、あれは」
目を向けた先、花壇の中央にある噴水の中に、煌めくものがあった。
「きれい」
近づいてみれば、空中の水流の分岐点に、拳ほどの大きさの花が浮かんでいた。サファイヤのように深い青色を湛えている。その煌めきを受け、周囲に咲いている花々は、いつもより麗しく色付いているよう。

「この花は、美しい煌めきを周囲にふりかけるのだわ。でも、いったい何。どうやって水の中に浮かんでいるの」
首を傾げた沙羅だったが、顔にはゆっくりと笑みが広がっていった。

「心の陰りが小さくなっていく。何でも構わない。どうしても手にいれたい」
吹き上げる水上の煌めきに手を伸ばし、幾度も飛び跳ねた。

パリン！
硝子の割れるような高く乾いた音がした。
瞬きほどの驚きのあと、茎の細い手応えを手中に確認した。
「やったわ！」
しかし、喜びは束の間のことだった。たった今まで、あれほど美しかった花が、見るまにも黒く変色し、萎れていってしまったのだ。

ー沙羅ー

不意に、背後から声とともに強い風が吹きつけた。
ーお前は、美しさをもたらすものを枯らしてしまったー
自分以外、誰もいなかったはず。沙羅は振り返った。

「あっ」
そこには若い男が浮かんでいた。背の翼を羽ばたかせている。ギリシャ時代の彫刻のような深い顔立ちと白い衣・・神の存在を否定はしていないが、はっきりと肯定してしていたわけでもない。
しかし、目の前にいるのは神の使者そのものだった。沙羅の膝は自然に地面に着いていた。

ーお前は心に咲いていた命の花を見失い、外に咲かせてしまった。
そしてそれを摘んでしまったのだ。静かに見つめておれば、元に返り花開き続けたものー
「天使様、私は何も知らなかったのです」
沙羅は厳めしく光る緑青の瞳に伝えた。そう言うしかなかった。

ーそれは謝罪か。だが、儂に何を言ってもどうなるものでもない。許しなら、足元の花に請うがいいー
視線を下げた沙羅は息を飲んだ。
花壇に咲いていた花々が、無惨に踏みにじられていたのだ。
「私はあの花だけに夢中になっていた・・・」

ーお前は、命の花はおろか、足元に咲く花までも枯らしてしまった。それがお前の今の心。明日から、お前は身をもって、そのことを知ることになるだろうー
そう言い残すと、天使は大きく羽ばたき、暗闇の彼方に舞い上がっていった。

「これはきっと夢。全ては、不安な心が作りだした幻」

沙羅はふらつきながら歩み、玄関の戸を引いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2184f/

沙羅の瞳

2010年10月21日22時35分発行